

活動のカタチは様々、
シニア世代の取り組み。

環境保全活動に取り組むシニア世代が、今注目されています。
若い時から取り組まれている方もいれば、50～60代になってから始めた方もいます。
今回はそうした皆さんを紹介します。また、珍しいケースとして、
高齢者ボランティアグループをサポートする活動も併せて紹介します。

レンジャーズプロジェクト

●NPO法人自然環境復元協会

シニアボランティアの良きパートナー



斜面で草刈りをする隊員

「この森を守れなくなるから、木を全部切って芝生にしようと思っているんだ。みんな年をとったし…」そうつぶやいたのは、自分たちが居住する大規模団地内の緑地を長年にわたり手入れしてきたサンシティグリーンボランティアの代表。相談を受けた自然環境復元協会は、当初は協会スタッフだけで手助けしていましたが、このような要望に本格的に応えようと、ボランティアを必要としているフィールドとボランティアをした人を結び付けるシステム「レンジャーズプロジェクト」を企画。2010年にスタートし、登録隊員799名、出勤回数125回、参加人数延べ1323人の活動に発展しました。現在

では、東京・横浜等に18カ所のフィールドがあります。

今回は、このプロジェクトが誕生するきっかけとなった大規模団地サンシティでの活動を取材。5月24日午前10時、都営地下鉄三田線志村三丁目駅に集合し、駅から徒歩10分ほどの現地に向かいました。参加したのは高校生、大学生、会社員等の17名。急斜面もある緑地の下草刈りでしたが、参加者の感想は「初めだけ楽しかった。良い汗をかきました」「1年に5回ぐらい参加しています」「時間が空いたので来てみました」と、誰でも気軽に参加できる活動として定着しています。



サンシティグリーンボランティアのメンバーから指示を聞くレンジャーズの隊員
*レンジャーズプロジェクトの詳細内容は <http://rangersproject.jp>

松原和夫さん

●NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会 理事

里海復活にかけるブンさん



砂浜に引き上げられた地引き網をのぞき込む子どもたち

7月16日、新聞紙上に「都内50年ぶり海水浴場復活」という文字が踊りました。この復活を目指し、2001年より葛西海浜公園西なぎさを拠点に活動してきたのが、NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会。ご紹介する松原和夫さんは08年に入会し、現在は中心メンバーの一人として活躍する66歳のシニアです。

「きっかけ？ 関口理事長とたまたま知り合いになったことかな…。理事長が『海をきれいにしたい、子どもたちを喜ばせたい』と熱く語るので、だったらお手伝いしようかと」。千葉県浦安で生まれ育った松原さんにとって、東京湾は庭のような存在。すんなりとボランティア

活動に入ったそうです。「子どもたちが本当に嬉しそうに遊ぶんですよ。地引き網なんかやるとすごいですよ!」

里海復活に向け、年間を通して様々なイベント等を開催していますが、毎回積極的に参加している松原さんいわく「ぜんぜん苦じゃないね、楽しいですよ。葛西の西なぎさで自由に海水浴ができるようにする、そんな目的がありますから…」

ちなみに、活動仲間は松原さんのことを「ブンさん」と呼んでいます。俳優の菅原文太似だからです。子どもたちの喜ぶ姿を胸に、ブンさんは毎回べか舟を操り沖に出て行きます。



海苔養殖体験の準備をする松原さん。作業に使うべか舟は松原さん個人所有のもので、毎回大活躍している

原 強さん

●NPO法人コンシューマーズ京都(京都消団連) 理事長

未来へのバトンを次世代に



蛍光管フォーラム2012in東京 会場の様子

私のNPOは今年設立10年目になりますが、私たちが取り組んだプログラムの一つが「家庭から出るやっかいなごみ」でした。何が「やっかいなごみ」なのかの調査から始め、スプレー缶の出し方へ、そして現在の蛍光管をはじめとする水銀含有製品の適正処理へと活動を展開してきました。

今年10月、国連環境計画の下で準備されてきた「水銀に関する水俣条約」が採択される予定です。この条約を受けた国内の対策づくりに、私たちの活動成果を役立てていただきたいと思います。また私たちの活動も、関係者と協働しながら水銀体温計や水銀血圧計等の回収処理システムづくりへと広がっていく必要があるようです。

私のNPOの前身「京都消費者団体連絡協議会」が設立されたのは1972年7月、ちょうど田中内閣が発足した時です。それから40年以上の歳月が流れ、気がつけば私もシニア世代に仲間入りです。シニアというのも悪くないもので、長年の経験からか、様々なことがつながって見え始めた実感しています。同世代の仲間との話の最後はいつも世代交代の話になりますが、私も「未来へのバトン」をうまく次の世代に渡せるように頑張っていきたいと思っています。無理せず、しかし確実に。



蛍光管の適正処理に取り組む原さん

佐伯昭夫さん

●NPO法人シャンティ山口 事務局長理事

タイ北部の山岳少数民族を支援して20年



現地の子どもたちと一緒に

1987年、福祉関係のイベント会場で一人の青年僧と出会い、ベトナム戦争やラオス内戦の影響でモン族等の少数民族が悲惨な状況になっているという話を聞き、衝撃を受けました。当時、曹洞宗ボランティア会山口県支部のメンバーとしてカンボジア難民の支援活動に関わっていましたが、その活動もいったん終了したので、自分たちのできる範囲でタイの山岳民族を支援しようと、93年にシャンティ山口を立ち上げました。

これまでに多くの仲間や支援してくれる皆さんのおかげで、モン族の子どもたちのために寄宿舎を建てたり、奨学金を支援する等の活動を行うことができました。もちろん、地球環境基金の助成があったからこそできたプロジェクトもあります。今、モン族が多く住むタイ北部地域でエコトイレの設置を進めていますが、これはその象徴的なプロジェクトです。トイレのない地域につくったことは画期的ですし、つくるのも彼らが中心になっています。

最近は1年の8割はタイで生活し、現地の人と一緒に活動していますが、自立支援が目標なので、今後の活動を担う後継者も現地で育てたいと思っています。できれば、元気なうちにプロジェクトの完成を見届けたいですね。



民族バッグを肩にした佐伯さん